

市民社会創造ファンド 連続セミナー第3回 『共に育む』助成について考える

市民社会創造ファンドの20周年記念事業である連続セミナー第3回が7月24日に開催され、タケダ・ウェルビーイング・プログラムを事例に『共に育む』助成について考えた。本セミナーは第1部が助成プログラムの概要と事例報告、第2部がそれを受けてのパネルディスカッションである。

<プログラム概要>

日 時：2022年7月24日(火) 14時～16時

方 法：オンライン (Zoom ウェビナー)

内 容：①助成プログラムの概要と事例報告

②パネルディスカッション

③総括コメント



<登壇者>※報告順

霜田 美奈 (特定非営利活動法人市民社会創造ファンド シニア・プログラムオフィサー)

坂上 和子さん (認定特定非営利活動法人病気の子ども支援ネット 遊びのボランティア 理事長)

清田 悠代さん (特定非営利活動法人しぶたね 理事長)

市川 はるひさん (武田薬品工業株式会社 グローバル コーポレート アフェアーズ & サステナビリティ
ジャパン CSR 課長代理)

<パネルディスカッション コーディネーター>

安藤 雄太 (特定非営利活動法人市民社会創造ファンド 副理事長)

<総括コメント>

長澤 恵美子さん (一般社団法人日本経済団体連合会 SDGs 本部 副本部長/タケダ・ウェルビーイング・
プログラム アドバイザー)

タケダ・ウェルビーイング・プログラムの概要と助成事例に関する報告

第1部では、武田薬品工業株式会社の寄付によって市民社会創造ファンドが2009年に開始した、タケダ・ウェルビーイング・プログラムで助成した2つの団体より、報告が行われた。

最初に、霜田美奈(市民社会創造ファンド)から、プログラムの概要についての説明があった。この助成プログラムは、「長期療養の子どもたちに“生きる力”を」をテーマに、難病等により長期入院や在宅療養している子どもたちとその家族を支援する取り組みを応援している。子ども

たちだけでなくきょうだいや親も対象であることや、非公募の計画型助成であることに特徴があることを伝えた。

次に、坂上和子さん（病気の子ども支援ネット 遊びのボランティア）と、清田悠代さん（しぶたね）より、助成を受けた活動について報告した。坂上さんからは、小児医療施設のボランティアとの交流やネットワークづくりをととても大事にしており、助成によってハウスグランマをいう拠点を病院の近くに構えるきっかけになった経緯を、また清田さんからは、プログラムオフィサーに見守ってもらえることによって、エネルギーや安心感をもらい、様々なきょうだい支援にチャレンジすることが出来たことなどが報告された。

最後に、市川はるひさん（武田薬品工業株式会社）より、企業としてどのようにタケダ・ウェルビーイング・プログラムに取り組んだのかについて報告があった。治療できる医薬品がないために苦しんでいる方々に何が出来るのかと市民社会創造ファンドに相談し、長期療養の子どもたちを支援する提案いただいたこと、また公募型ではなく計画型で進めたことやステークホルダーダイアログを行ったこと、従業員がボランティアとして参加することの意味などについても報告いただいた。

パネルディスカッション：共に育まれる助成に必要なこと

第2部では、4人の報告者とともに長澤恵美子さん（日本経済団体連合会 SDGs 本部／タケダ・ウェルビーイング・プログラム アドバイザー）にも参加いただき、安藤雄太（市民社会創造ファンド）のコーディネートでパネルディスカッションが行われた。

制度で支援できない隙間に対してどのように対応したか

坂上さん：私たちの活動の特徴は、非常に近い関係の中で母親のニーズを拾っていること。結果としてそのことが制度では支援できない人たちへのサポートにつながっている。そして外の立場でプログラムオフィサーと一緒に考えてくださるといのは当時を思い出すと心強かった。

活動を通して、病院や地域などにどのように影響を及ぼしたか

清田さん：各地できょうだい支援の研修を続けてきたことで、様々な方々とのつながりが出来た。きょうだい支援に対する問い合わせが増え、ネットワークを広げてきたことに意味があったのと思う。

大勢にアピールできる公募ではなく、計画型としたことに対する社内の反響は

市川さん：透明性を確保するために、第三者の立場でアドバイザーから意見をいただき、最終審査は市民社会創造ファンドにさせていただくということで、武田は決定には一切関与しないようにした。多くの人に知ってもらおうということに関しては、この分野では規模の小さな団体が多い中で、地道にしっかり育てていくことが重要と市民社会創造ファンドの担当者が会社に話したと聞いている。

助成金だけでなく、従業員にも参画してもらうことについて

市川さん：シャイな従業員が多く、ボランティアに人が集まらないこともあった。しかし、今の社長が、1番最初に考えるのは患者さんのことだと発信し続けたことで、活動に共感してくれる人が増えてきた。いつもと違った視点で患者さんを考える機会を提供することが私たちの仕事と考えている。

助成プログラムにおいてステークホルダーダイアログを取り入れることの意味とは

長澤さん：団体の掘り起こしや活動に対する目利きが出来ることが必要で、そこに市民社会創造ファンドのプログラムオフィサーが関わる意味があった。ステークホルダーダイアログでは、助成プログラム自体を皆で一緒に育む姿勢が表れていたと思う。立場を超えて皆で目標を一緒に考えることが出来たことが非常に大きな特徴である。またプログラムの初期段階で一緒に考えたことで、長期療養の子どもとその家族が抱える課題を深掘りすることができた。そしてその支援をどう仕組みとして作っていくのかと試行錯誤しながらプログラムを発展させてきた。団体だけではなくプログラムも共に育つということに関係者全員で取り組んできたと理解している。

ステークホルダーダイアログに参加した際の感想

清田さん：同じところを目指している人達と前向きなディスカッションをさせてもらった。ディスカッションの最後に「これだけの人たちが同じ思いで進もうって考えていたら、社会って変えられるよね」というお話があり、すごく感動した。小さく活動を続けていこうと思っていたところから社会を変えられる、に視点を切り替えたことが最初の段階で行われたと思う。

シブレンジャー（「しぶたね」で活躍するヒーロー）：助成を受けている団体に対して、プログラムに対する意見や要望を聞いてくださり、驚いた。質問をいただくことがなければ、我々の方からプログラムに対して口出しをすることはなかったと思う。皆さんの姿勢にすごく驚き、感動した。

プログラムの展開について

霜田さん：ステークホルダーダイアログの中では、助成対象団体からプログラムに対する意見を丁寧にくみ取り、対話を通して互いの理解が深まっていった。第1期では病院に入院中の子どもたちを対象とし、第2期では退院後の子どもたちが過ごしている地域に、第3期では院内や在宅を問わずコロナ禍での新規事業を応援しているが、プログラムの展開については団体から教えていただいたことが1番大きかった。

助成プログラムに対する要望について

坂上さん：中間支援として、月日を経た現在においてどんな問題があるかを聞いてもらい、プログラムに活かしてほしい。

清田さん：助成プログラムがそのまま続いて、よりたくさんの方に届いてほしい。

シブレンジャー：お金だけでなく、心の支えにもなってくれるやり方を続けてほしい。

市川さん：引き続き、対話を重ねながらプログラムを作っていきたい。計画型助成を行っている他の企業とつないでいただきたい。

こうした要望について一言

霜田さん：プログラムオフィサーとして身が引き締まる思いで、さらに精進していかなければいけない。団体の声を聞く機会を設けながら、一緒に今後の市民社会を考えていきたい。

総括コメント：市民社会創造ファンドは企業と NPO をつなぐ役割を担う

最後に、長澤さんから総括コメントをいただいた。

企業の社員が、社会の課題をちゃんと理解していくこと、プログラムオフィサーが方向感を見極めることが大事である。また企業と NPO の間に立って、互いの思いを翻訳したり、意義を説いたり、対話のファシリテーターとなったりすることが中間支援組織、特にプログラムオフィサーに求められるのではないか。

またステークホルダーダイアログをもう一回開催してはどうか。対話を通して、プログラムもさらに新しいステージに進むと思う。それだけステークホルダーダイアログは重要な役割を備えている。最後に市民社会創造ファンドが、今後も企業や財団、個人の相談に乗りながらより良い助成プログラムを企画開発し、社会に生み出していくことも重要である、と締め括った。

以上